

安威0号墳出土の玉類について（1）

廣瀬 時習

1. これまでの経緯

茨木市安威の安威川西岸丘陵地帯に位置する安威古墳群は、前期から後期まで継続的に築造された20基の中小規模の円墳からなる古墳群として知られている（森 1951）。

1981年に、安威0号墳および1号墳の発掘調査が行われた。その調査成果については、1982年に奥井哲秀氏によって概要が紹介されている（奥井 1982）。この段階では、副葬品などの出土遺物については、一部の写真が掲載されるとともに、若干の記述が行われている。近年、本館『館報』第1・2号において河野正訓・清水邦彦両氏により、埋葬施設の概要がまとめられるとともに、出土状況図が提示された（河野・清水 2016、2017）。また、粘土槨については、清水氏により報告と検討が行われている（清水 2016）。鉄器については、実測図・写真が公表され、その全容が明らかにされている。両氏の検討の詳細については、当該報告に譲るとして、2つの埋葬施設出土の鉄器を種類と数量と内容などから検討し、1号粘土槨出土の鉄器よりも、追葬と考えられる2号粘土槨から出土した鉄器の種類・数量が豊富なことやその小型化傾向が顕著なことが明らかにされた。そして、鉄器の分析から埋葬時期を前期末～中期初頭という従来からの見解で矛盾がないとした。また、副葬内容の相違などから2号粘土槨の被葬者の方が「格」が高い人物であったという結論を導いている。

本稿では、これまで一部が写真で公開されていた玉類について報告を行いたい。先述の鉄器の検討の中では、玉類についても2号粘土槨が量的にも豊富なことから、その「格」の相違がある可能性が指摘されている。ただし、時間的な問題と紙幅の関係から、本稿では2つの埋葬施設から出土した玉の概要を記し、そのうち1号粘土槨出土品について報告することとしたい。2号粘土槨については、次号に掲載の予定である。

2. 安威0号墳出土玉の全体像

安威0号墳の全体像については、先述のように

奥井氏の報告とともに、これをもとに河野・清水両氏が本館館報においてまとめている。副葬品などの全体像については、河野・清水の報告を参照していただくこととして、ここでは玉類について記しておくこととする。

奥井氏の記述を参考にすると、南北に並んだ2つの粘土槨のうち南側に位置する1号粘土槨は、埋葬施設西側を流失しているが、鏡の出土地点より西側の0.4mの地点からヒスイ製勾玉とともに26点の碧玉製管玉、極小の小玉10数点が出土したことが記されている。2号粘土槨では、埋葬施設床面の東端から約1mのところに斜縁神獸鏡1面が出土し、その周囲から石釧2点とともに、丸玉10数点、琥珀製勾玉が出土し、鏡の下部から丸玉10数点が出土したとされる。また、埋葬施設床面の西端部で勾玉・管玉・棗玉・丸玉・小玉等が重なるようにかたまって出土したとされている。2号粘土槨の玉類の総数は、水晶・ヒスイ・滑石・琥珀製の勾玉9点、管玉30点、丸玉48点、小玉76点、棗玉1点とされている。

これについては、今回報告にあたって玉類の収納を確認したところ、概要の報告段階の記述とは若干の齟齬があることが明らかとなっている。率直なところ、現状では一部の玉類には対応するラベルが明らかではなく、出土した埋葬施設が明らかではないものがある。

今回の報告にあたって、本館清水氏に資料の確認をしていただき、資料の収納状況や概要報告の記述と比較を行い、出土した埋葬施設ごとの資料を以下のように特定した。

まず、1号粘土槨出土品については、掲載された写真から勾玉1点が確認できる。管玉については、奥井による概要の報告では26点の出土が記載されている。直径2mm、全長10～16mm程度のものとある。ところが、清水氏により収納の状態や、対応するラベル・ケース等を確認したところ、概要の直径・全長、材質的な類似性から28点に対応するものと考えられる（図1・写真1）。また、概要報告の記述に記された径約1～2mm程度の小玉は、完形のもの12点と破片12片が確認でき

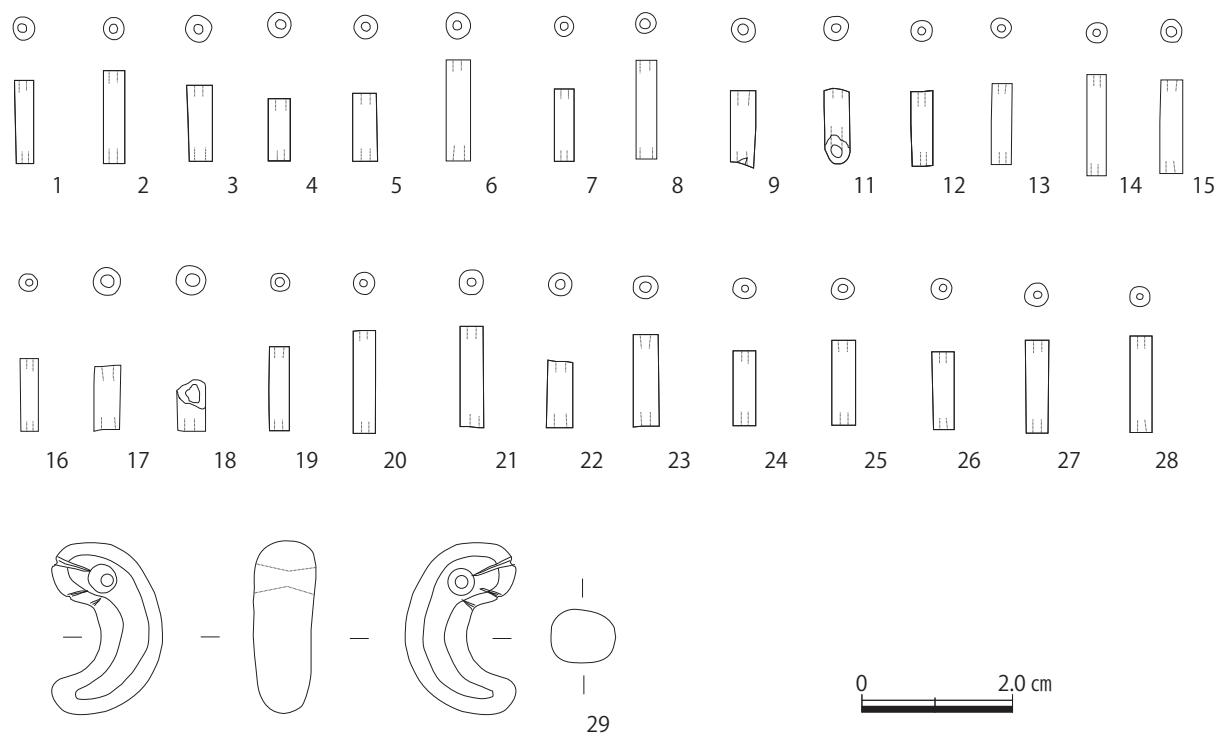


図1 1号粘土櫛出土玉類（番号は表と対応）

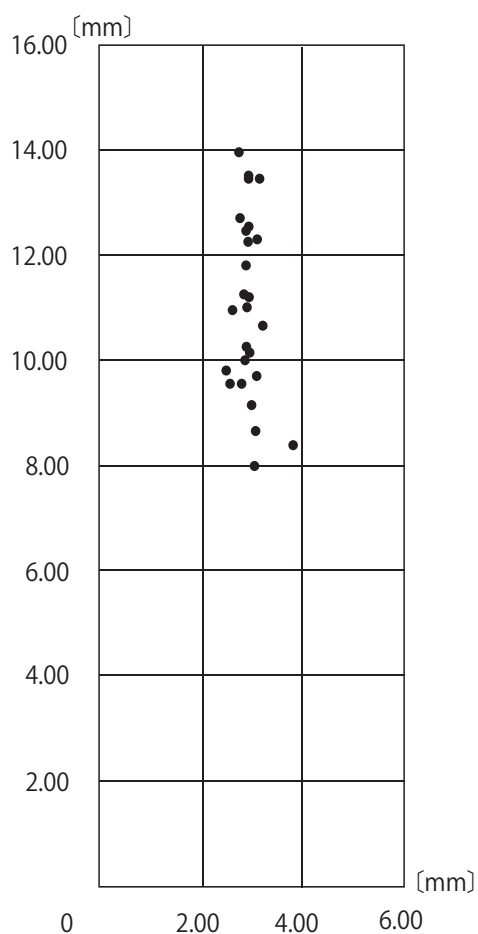


図2 管玉法量散布図

た。合計 20 点程度の数量が確認できるようなのである（写真 2）。奥井の報告にもあるように、最大で直径 2mm、高さ 2mm 程度のものである。概要報告では「小玉」と記載されているが、本稿ではサイズが非常に小さいことから「栗玉」と表記しておく〔註 1〕。

一方、2号粘土櫛については、詳細の記述がなく、製品のサイズを示す数値は知られていない。ただし、1号粘土櫛出土品を除くと以下になる。勾玉は、水晶製 1 点、ヒスイ製 4 点、琥珀製 3 点、滑石製 2 点となる。管玉については、29 点に対応すると考えられる。このほか、注目されるのは厳密には管玉とは相違する形状ではあるが、エンタシス状の形状も持つ軟質の緑色凝灰岩製の玉が 10 点出土している。棗玉は、メノウ製が 1 点である。ガラス玉は、いわゆる丸玉が 82 点以上、小玉が 95 点以上出土している。

1号粘土櫛・2号粘土櫛とも概要報告よりも数量が多い。これについては、調査の初期段階の埋葬施設の確認のためのトレンチの掘削時の出土品があることが、1号粘土櫛の出土品のラベルの記載と関連がある可能性が高い。こうした資料の一部が記録から漏れていた可能性も考えられるだろう。

3. 1号粘土槨出土の玉類

第1号粘土槨からは、先述のようにヒスイ製勾玉1点、緑色凝灰岩製管玉28点、ガラス粟玉20点以上が出土したことが確認された。

勾玉（図1-29）は、ヒスイ製のやや透明感に乏しい乳白色にエメラルド色の混じった淡緑色のもので、全長23.85mm、幅15.10mmを測る。頭部に中位から頸部境界に丁字頭を刻み、丸みを持った断面形状を持つ。断面は、丸みある断面形状である。C字状に見える側面の上半部にやや窪んだような部分がみられる。古墳時代前期には透明感の強い材質の勾玉が多くみられるが、中期前葉以降には乳白色に濁るものが増加傾向にあることなどが先行研究で指摘されている（大賀2002）。こうしたことから考えると、中期的な様相を示す可能性がある。

管玉は28点について実測および計測を行った。計測は、ノギスで小数点第2桁までを計測している。ただし、図1-10については、両端を欠損した碎片であったため実測を行っていないほか、計測値も計測可能な一部しか記載していない。また、図1-11・18は、一方の端が欠損しており、長さには問題がある。これら3点については、材質も軟質で脆いことが共通している。管玉の穿孔に関しては、肉眼観察のみでX線撮影等は行っていないが、28点とも両面から穿孔されたものと考えられる。

管玉の法量に注目すると、直径の平均で最少が2.65mm、最大が3.81mmを測るが、平均は2.97mmで、大部分が2.8～3.1mm程度の間に収まる。直径からみると非常に均質な製品群とみることができる。また全長は、最小が8.00mm、最大が13.50mmで、平均は10.98mmである。図2に、直径と全長の計測を行った25点の散布図を掲載した。散布図からみても直径の規格的な側面が明瞭である。

また、材質については、色調は図1-3が濃緑色の硬質素材、図1-16がやや青色の強い青灰色であった以外は、ほとんどが淡緑色でマンセルカラーチャートの2.5BG6/2～5/6付近の範囲に収まる製品である。一部の製品では、石筋が明瞭にみられるという特徴がある。

こうしたことから判断して、第1粘土槨から出土した当該資料群は、長さにはやや大きな偏差が

みられるものの、かなり均質な製品群として捉えることができる。先述のように、保管状況や概要の報告で記載された数量の不一致など資料の特定に問題がみられた。しかし、本報告のデータからみると、その一括性は担保できる可能性が高い。

ガラス粟玉は、先述のように直径、高さとも2mm程度のもので、中央部に5～8mm程度の孔がみられる（写真2）。十分に接合を試みたとは言えないが、破片資料12点のうちいくつかは接合する可能性を考慮する必要があるが、最大で24点と言うことことになる。色調は、いわゆるスカイブルーのマンセルカラーチャート5B6/8～10付近の製品である。

ガラス玉については肥塚隆保、田村朋美、大賀克彦などにより精力的な分析研究が行われ、時期的な変遷やガラスの産地と流通の問題などについて明らかにされている。こうしたなかでは、ガラス小玉類に関しては、古墳時代前期から中期、後期にかけてアルカリ珪酸塩ガラスのうちソーダガラスが多くみられることが知られている。現段階では、自然学的な分析は行われていないため、詳細は不明である。今後、自然科学分析を行う必要があると考えられる。

4. まとめと展望

今回、1号粘土槨出土の玉類について報告を行った。ヒスイ製勾玉と緑色凝灰岩製管玉、ガラス粟玉という組成と考えられる。勾玉については、先述のように古墳時代中期的な様相もみられることは注意点である。また、管玉は両面穿孔であることや緑色凝灰岩という材質、法量などからみて、古墳時代前期的な管玉として大きな齟齬はないように感じられる。玉の組み合わせとしては、シンプルな組み合わせであり、弥生時代から見られる。しかし、ガラス粟玉は非常に小さくそのほかの2種類と単純に連珠に組み合わせるのは難しいのではないだろうか。

一方で、先述のように2号粘土槨からは、多様な材質の勾玉が出土している。水晶・琥珀・滑石など古墳時代前期後葉以降に副葬が始まる勾玉が含まれる点は重要である。メノウ製棗玉がみられることは特筆される。また、特異なものとして軟質の緑色凝灰岩製品で両端のエンタシス状に細くなった管玉が10点出土している。粘土槨西端部

表 1 号粘土槨出土管玉計測表

番号	遺跡名	遺構名	種類	石材	色調	直径				全長	穿孔径		備考
						[1]	[2]	[3]	平均		[1]	[2]	
1	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.90	2.85	2.80	2.85	11.25	1.35	1.65	
2	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.85	2.90	2.90	2.88	12.45	1.25	1.55	
3	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	濃緑色	3.20	3.20	3.25	3.22	10.65	1.95	1.75	
4	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	3.10	-	3.00	3.05	8.00	1.20	1.25	石筋明瞭
5	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	3.00	-	3.00	3.00	9.15	1.50	1.45	
6	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.95	2.95	2.95	2.95	13.45	1.55	1.90	
7	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.55	-	2.60	2.58	9.55	1.40	1.35	石筋明瞭
8	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.90	2.90	2.85	2.88	11.80	1.75	1.75	
9	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡灰緑色	3.00	2.95	2.95	2.98	10.15	2.10	2.70	端部欠あり
10	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑白色	3.65	-	-	-	-	-	-	軟質 砕片
11	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	3.10	-	-	3.10	[9.70]	1.40	-	軟質 2つに割れている
12	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑白色	2.80	-	2.80	2.80	9.55	1.10	1.20	石筋明瞭
13	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.60	-	2.65	2.63	10.95	1.25	1.40	石筋明瞭
14	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.80	2.80	2.70	2.77	13.95	1.50	1.70	
15	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.90	-	2.95	2.93	12.25	1.55	1.40	
16	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	青灰色	2.50	-	2.50	2.50	9.80	1.00	1.40	
17	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡青灰色	3.83	-	3.80	3.81	8.40	2.10	2.20	
18	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑白色	3.55	-	-	3.55	[6.65]	1.95	-	
19	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.95	-	2.95	2.95	11.20	1.60	1.65	石筋明瞭
20	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡灰緑色	2.95	-	2.95	2.95	13.50	1.50	1.50	
21	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡灰緑色	3.10	-	3.20	3.15	13.45	1.85	1.90	
22	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡灰緑色	3.10	-	3.05	3.08	8.65	1.45	1.90	
23	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡灰緑色	3.10	-	3.10	3.10	12.30	1.60	1.65	
24	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.85	-	2.90	2.88	10.00	1.35	1.35	石筋明瞭
25	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.90	-	2.90	2.90	11.00	1.60	1.60	
26	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡緑色	2.90	-	2.90	2.90	10.25	1.25	1.25	
27	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡灰緑色	2.95	-	2.95	2.95	12.55	1.35	1.40	
28	安威0号墳	1号粘土槨	管玉	緑色凝灰岩	淡灰緑色	2.75	-	2.80	2.78	12.70	1.30	1.35	
平均値〔直径・全長〕										2.97	10.98		

分から勾玉・棗玉・丸玉・小玉などと重なるように出土している。こうしたことから考えて、鉄器における成果とも一致して、2号粘土槨の方が後出することは明らかである。

次回の報告では、2号粘土槨出土の玉類を資料報告を行うとともに、玉類全体について検討を加えたいと考えている。

謝辞

貴重な資料の調査と報告の機会を与えていただいた

茨木市立文化財資料館 館長 前田恵子氏、学芸員 清水邦彦氏に厚く御礼申し上げます。

註

1) ガラス製小玉と言われるものには、類似する形状を持つ丸玉・小玉・栗玉などの名称が用いられている。本来は、これらの分類基準を明らかにしておく必要あるが、ここでは、直径10mm程度以上を丸玉、10mm未満～直径5mm程度を小玉、直径5mm以下を栗玉としておくこととする。

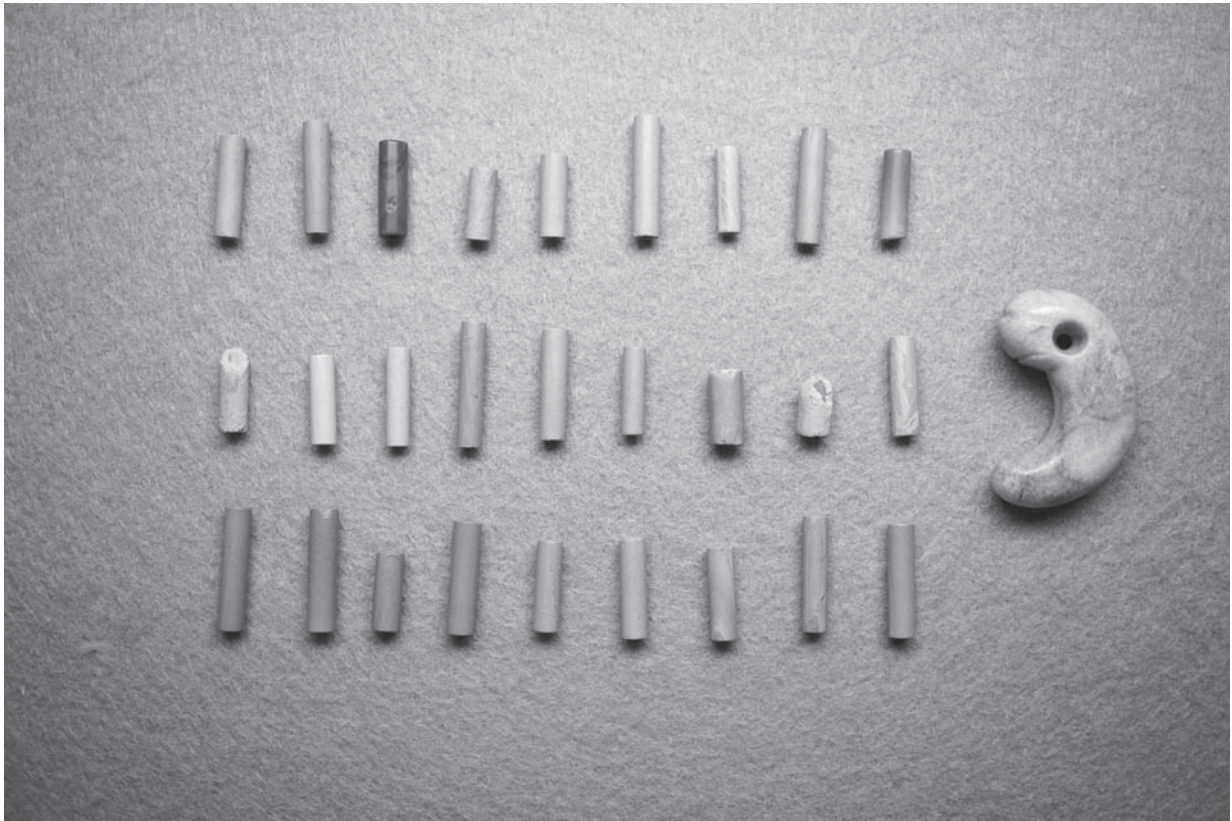


写真1 1号粘土柳出土ヒスイ製勾玉・緑色凝灰岩製管玉

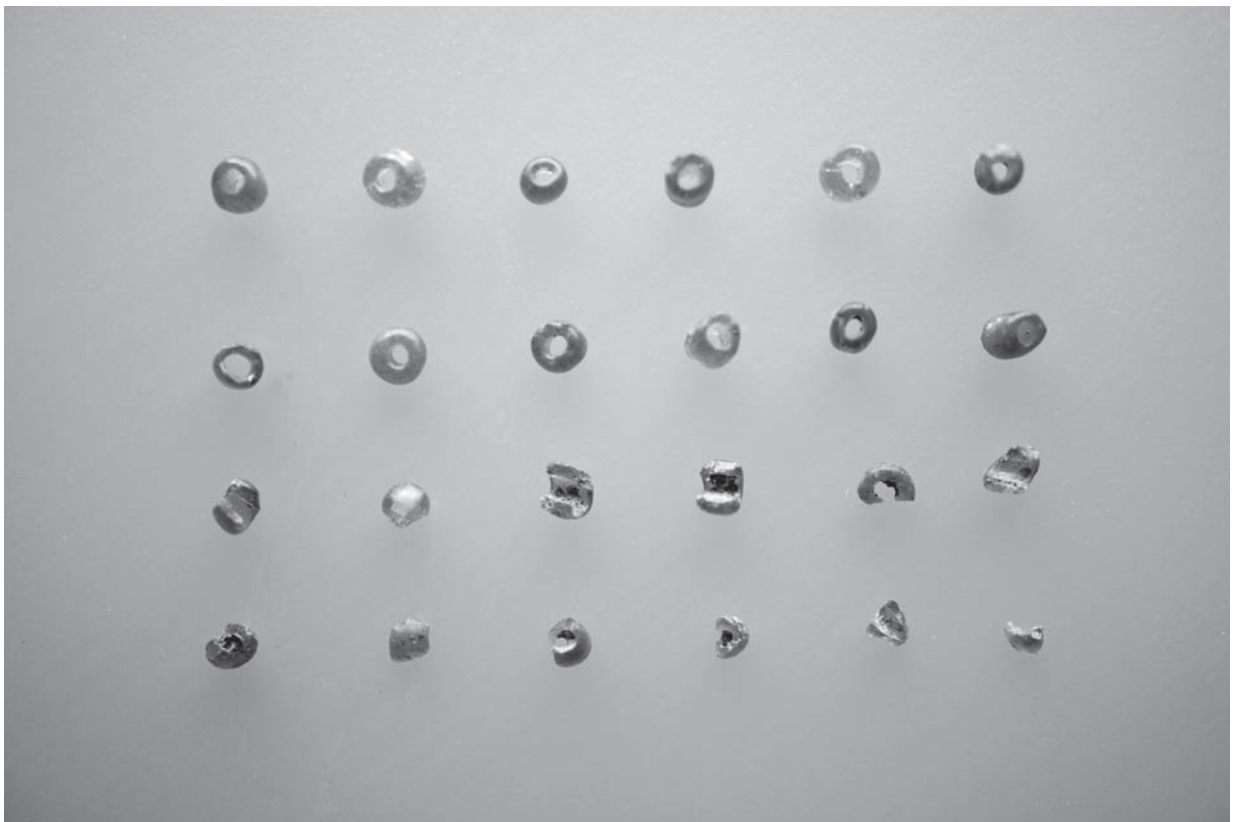


写真2 1号粘土柳出土ガラス粟玉

参考文献（五十音順）

- 大賀克彦 2005 「弥生・古墳時代の玉」 『考古資料大観』
第6巻青銅・ガラス製品 小学館 pp. 313-320
- 奥井哲秀 1982 「茨木市安威0号墳、1号墳の調査」 『大
阪文化誌』 第15号 財団法人大阪文化財センター
pp. 29-38
- 河野正訓・清水邦彦 2016 「茨木市安威0号墳から出土
した鉄製品（1）」 『茨木市立文化財資料館館報』 第
1号 茨木市立文化財資料館 pp. 1-4
- 河野正訓・清水邦彦 2017 「茨木市安威0号墳から出土
した鉄製品（2）」 『茨木市立文化財資料館館報』 第
2号 茨木市立文化財資料館 pp. 1-7
- 清水邦彦 2016 「茨木市安威0号墳の粘土槨について」 『茨
木市立文化財資料館館報』 第1号 茨木市立文化財
資料館 pp. 5-7
- 廣瀬覚 2014 「安威古墳群」 『新修茨木市史』 第7巻（史
料編 考古） 茨木市 pp. 266-273
- 森浩一 1951 「安威古墳群の問題」 『古代学研究』 第5
号 古代学研究会 pp. 17
- 森浩一 1978 「摂津の古墳と遺物」 『大阪府史』 第1巻
大阪府 pp. 609-612